

フィールドワークと調査地被害

森田 真也

はじめに

日本民俗学がその学問的發展において、常にフィールドワークを基軸として現在までできたことは、疑いのない事実である。また、今日においても個人の研究のために行う調査以外に、民俗誌作成を念頭においた、地方公共団体による行政調査、大学等研究会による調査といった形で、多くの研究者が全国各地で年間通じて活動している。

このような状況において、フィールドワーク自体が方法論的な問題のみならず、実際の現場でもいくつかの弊害をまねいている。本小稿では、現場でのフィールドワークによる調査地被害の問題を取り上げ、インフォーマントと研究者の関係について論じてみたい。

1. 調査地被害の実態

調査地被害の実態については、フィールドワークの経験の乏しい私の目にもあきらかである。沖縄のある島での話である¹⁾。その神人^{カインツネ}の古老は初めて会った私に対して激しい口調でこう語ったのである。

「話をすることはできません。あんたたちは、調査だとかなだとかいって何度も来て、一つなにかいえばあれは何だとか、それは何だとか次から次へと聞く。そうしてどう答えればいいのかわからなくなってしまって、頭が痛く

なってしまうんですよ。」

「この前の祭りのときもそうだった。Nテレビ局は前も見えないくらいライトを照らして、おっかけまわし、ことわりもなしにMさんの家の上まで上がりこんで、私はライトで目がチカチカし頭が痛くなって次の日病院にいったんですよ。」

この古老だけではない。

「有名な先生だけだね。でも若い頃は、前の神女(女性司祭者)さんに色々と次々質問して。それで、(神女さんは)昔の人だから、標準語を話すのがうまくないでしょう。それで答えるのにこまってしまって、一回(先生本人に)いってもらったことがあるんですよ。」

「私は知らなかったんですよ。テレビを見ながら後向きで。(話したことが)テープにとられてたんですね。そしたらそれが新聞にのっちゃって。親戚からも色々いわれて大変だったんですよ。」

多くの研究者が訪れるこの島で、上記のような声は代表的なものにすぎない²⁾。とくに前者の場合は私の誠意が足りなかったせいもあろう、またこの島で本年度に行われるはずであった祭りが、諸々の事情で中止を余儀なくされたという事態にあって、島全体が若干ナーバスになっていたせいもあるだろう。しかし、このような出来事がこの島だけの特殊な状況だといえるであろうか、テレビ局や新聞社の取材と我々のフィールドワークが違うものだけといえるであろうか。根掘り葉掘り質問して、テープに録音し、祭りの進行も考えずカメラのストロボをたく³⁾。あげくのはてには、聖地や墓地に侵入する者もいるらしい。「取材」「報道」の自由を旗印にするマスコミ、括弧の中を「学問」、マスコミを研究者としても文意は通りそうである。

地方公共団体による山村や農村の調査でも同じである。実際日中暇を持って余し、話相手を求めている老人よりも、野良仕事や山に出ている人間のほうが多い。そんな状況でも「行政」の肩書きを持って協力を願えば、忙しい生業の合間に時間をとっていただくことはおそらく可能であろう。

しかし、彼らの不満は面とむかっては語られない場合もある。以前ある地域で行政調査を行った際、快く調査に応じてくれた人がいた。2時間ほどの

聞さしることもなく調査を終えることができた。数時間後ゲートボールに出掛けたこの人は「何か変なのにつかまっちゃって、早くかえそうとしたんだけど根掘り葉掘り聞かれたよ。」と他の人に語ったのである。

別の地域の話である。あまりに調査に協力的なので2日連続して同じお宅にお邪魔したことがある。私としては2日とも和やかな雰囲気気で談笑とともに、話を聞かせていただいたつもりであった。ところが「2日つづけてこれちゃ、身体がもたねいよ。」と役場に直接クレームの電話が入ったのである。どうも野菜の収穫の忙しい時期、昼寝の時間にお邪魔したのがいけなかったようである。私もまた調査地被害をもたらしていたのである。きっと私自身が知りえない私自身による、いくつもの調査地被害があるにちがいないことだろう。

行政調査では時間的な問題もあろう、調査地域が限定される場合もあるであろう。調査する側のさまざまな制約があるのは事実である。しかし、調査される側の論理もあるのである。忙しい時期に、集団で村を闊歩し、何度もやってきては同じようなことを聞いていく。インフォーマントのなかには積極的に協力を願う者もあれば、疎ましく思う者もいるはずである。そこに、「学問」を大義名分とし「調査してやる」という意識で、「行政」の肩書きを持ってして切り込んでいくことはずいぶん乱暴な事である。このうえ民俗誌の発刊こそが（のみが）地域への還元であるとするなら淋しい話である。

直接的な調査地被害⁴⁾をもたらしているのはすべての研究者ではない、おそらくごく一部の心もとない者であると信じたい。しかし、我々がフィールドに出掛けるかぎりにおいて、多かれ少なかれなんらかの迷惑を多くの人々にかけていることは認識すべき事であろう。わずか数年しかフィールドワークを経験したことのない私においてもこのような有様である。はたして民俗学が本当に「経世済民」の学である（あった）のだろうか。我々は民俗誌の数だけ、研究の数だけ、そしてフィールドワークの数だけの反省をもつべきであろう。フィールドワーカー全員が自戒の念を持ってあたらなければならぬことである。

2. 調査地被害の背後にあるもの

それではいったいなにが調査地被害の原因なのであろうか。研究者個人の資質、少ない時間での成果を要求する行政側といくつかの問題点をあげることができよう。しかしそこには、ひとえに研究者のモラルや心がけという言葉では解消しきれないであろう問題をはらんでいるようである。

そこには、インフォーマントを無視した、フィールドを単なる客体としかみなきないデーター偏重主義が見え隠れしている。つまりインフォーマントの背後に、いわゆる固体としての「民俗」が存在しており、それが簡単に採取可能であるかのような認識の存在が問題なのである。そうするとインフォーマントが誰であろうとフィールドがどこであろうと関係ない、情報としての「民俗」そのものみに焦点がいき、自らの理論枠にあったものが取捨選択されていくのである。彼らの語りは切り刻まれ、つなぎ合わされ、集団へとすり替えられていく。個人がいつのまにか地域へとくられてしまう。インフォーマントは情報提供者以外の意味を持たなくなり、そしてついにはフィールドワークの意味や構造に対する無理解が生まれるのである。資料化と記述のみが重要とされ、その間に介在する研究者とインフォーマントの問題は等閑視されてしまうのである。

本来「民俗資料」とは研究者とインフォーマントの間で、フィールドワークという「場」を通して生成されるものである。ソリッドな情報と記述の間にはインフォーマントと研究者が介在している。インフォーマントは研究者との出会い（対面調査）において、自らの直接及び間接経験の記憶の束の中から、いくつかの解釈を含めた「言葉」を我々に提示してくれる。当然それはインフォーマントと研究者の二つの主観性を内在した、知的往復行為⁵⁾を前提としたものとしてとらえるべきであり、その「言葉」にどのような意味付けを与え記述するのが我々の仕事なのである⁶⁾。

このように「民俗資料」の生成するプロセスには研究者とインフォーマントの両者が常に関わっている。いいかえれば、フィールドワークでの両者の認識作業の集積が「民俗資料」を生成していくのである。フィールドワーク

とは、研究者とインフォーマントの相互理解にねざした共同作業といえるのである。

おわりに

調査地被害は、特に多くの研究者が訪れる地では切実である。小さな被害は全国各地に数えきれないほどあるであろう。これはフィールドワークを基本とする学問には必ずついてまわる問題である。当然全てを解決するのは不可能である。しかし、我々がインフォーマントに対して、フィールドワークに対して、何らかの議論を煮詰めていき、それにあたることはできるはずである。フィールドワーク自身の理論的、そして実践的な再考が、調査地被害を少しでも減らす手立てとなるというのは楽観的な観測であろうか。

<註>

- 1) 沖縄における調査地被害については、野口武徳が「解説民俗調査」『現代日本民俗学』Ⅱ 三一書房 1975年 p286～287において「先学の一部の人の輝かしい、そして恥ずかしい戦跡」という言葉で表し、具体的な事例を述べている。
- 2) この島での調査地被害の実態は、テレビ局・新聞社・カメラマンのそれも含めるとかなりのものと思われる。私が紹介したものはほんの一部である。
- 3) 祭礼における、民俗学者やマスコミ取材人の調査態度については、赤松啓介の『非常民の民俗境界』明石書店 1988年 p.90～91、p.166～169等においてふれられている。
赤松は、実際に研究者も「民衆のなかの一人として(祭り)を実感する」こと、つまり祭礼を共有することの身体的精神的な態度の重要性について指摘している。
- 4) 民俗学者のもたらした直接的な調査地被害については、宮本常一の「調査地被害」『現代日本民俗学』Ⅱ 三一書房 1975年に詳しい。

- 5) もしもこの知的往復行為を、研究者の訊問調査や従来の様式のみにとらわれた項目主義的な調査にしてしまうなら、それは一方的な閉じられた調査となるのは言うまでもない。
- 6) これは従来民俗学としての学問様式の中に、インフォーマントの「言葉」を「民俗資料」として封じこめるのを意味しているのではない。研究者の責任とその位置付けという意味である。